

会いたくなったら

「わぁ可愛い」

組んでいた腕をいとも簡単に解き、糸切帝の恋人は通りかかった雑貨屋の棚に釘付けになっただけだった。

慣れとは恐ろしいものだ。帝は思う。一緒に歩く時、帝はほんの少し腕を空ける。その空いたスペースに、恋人はするりと腕を滑り込ませる。そうするようになったのはいつだったか。初めこそドキドキしていたし、周りの目が気になったが、月日が経つにつれてそれが自然になるとともに、ドキドキすることも、周りの目が気になることもなくなった。

自然になったのは組む瞬間だけでなく、解く瞬間もだ。何だか名残惜しそうに離す体温に、自分も名残惜しいと思ったものだが……今はその感覚はない。

けれど、変わらないものもある。今目の前で棚のカップを上げしげと見つめる恋人の顔はやはり可愛い。欲目が入っているのかそうでないかをモはや判別出来なくなっている程度には、ふたりが過ぎて来た時間は長い。あと、彼女が見る雑貨のデザインが、たいがい絶妙にあの縦に長く無表情な妖精を連想させるものである点も、変わっていない。そろ

そろ変わってくれても良いと思うが、残念ながらあの妖精との絆を思えば変わることはそう無いだろう。

「ああこれすごく可愛いけど……うーん」

当の恋人は、手に取ったカップのひとつを棚に置くかどうかを悩んでいる。置こうとしてやめて、置こうとしてやめて。すごく気に入っている風だが、即決出来ないのは。

「買うんじゃないのか？」

帝はヒョイとカップを恋人の手から奪う。彼女のことだから金額は問題ではないだろうが——実際大した値段ではなかった——それ以外に購入を躊躇う要素はあっただろうか。想像の外のことを、帝は問う。

「ん——正直欲しいけど、似たようなカップがね、うちにいっぱいあるの。さすがに買い過ぎかなって」

（このデザインが？）

うっかり口に出しかけて、帝はその言葉を飲み込んだ。彼女の家に何がどう置いてあるかなどは存じ上げないが、棚の中に似たような柄のカップがずらっと並んでいる様子を想像したら、帝は一瞬背筋に冷たいものが走った気がした。別に顔は描いてないのに、何かこう、視線を感じるようなそうでないような。

しかし彼女は帝の思考とは裏腹に相当迷っているようだ。躊躇するほどたくさんカップがあるのに、検討してしまうというのはよほど気に入ったのだろう。

「やっぱり買うのやめようかな。多過ぎるし……お店で使ってもらうにはちょっとデザインが——」

「買えば良いじゃねえか、買ってやるよ」

言うなり、帝は彼女の返答を待たずにレジに向かう。ちよつと、と焦ったような声が帝の背に届く。お構いなしに帝はさつさと会計を済ませて、カップの包みを受け取った。

が、帝はそれを恋人に渡さず、「おい、行くぞ」と声を掛けるだけ。彼の可愛い恋人は、小走りに彼を追って来て、隣に並んだ。腕はほんのり空けてあるが、その隙間に彼女の手は滑り込んで来ない。

「ちよつと、ミカド」

「お前ん家に置いとくカップが多いんならうちに置いとけよ。そういや、まだお前のものとか置いてないしな」

「へっ」

柄こそ気になるものの、帝の家に彼女の物が置いていないことは事実だ。毎度毎度『客用』の食器じゃあな、と帝が空中に向けて言うと、恋人は急に帝の空いた腕にしがみつい

て来た。

「あら、策士じゃない。『コイツに会いたきゃ俺ん家来いよ』ってこと？」

「……………ん!？」

「お家デートをたくさんしようぜってこといい？」

さすがにそこまで考えが及んでいなかった。家に同じようなものが多いのが気になるなら、まだ物が無い自分の家に置けば気にならないし、客用でなく自分用のカップが使えて良いだろ。そんな単純なことしか帝は考えていなかったのだ。策士、とは。それは自分のような奴に使う言葉ではない。

「顔赤いわよ。今更気づいたの？」

「……………るせ」

「ふふ、有難う、買ってくれて」

年月が経ってもまだ、彼女は帝の余裕を奪うのだ。まだ、奪えるだけの要素が残っているのだ。もう無いだろうと思っても、まだ。

彼女の余裕を奪って優位に立とうなんてまだ早い。妙に渋い声が帝の中に響いた。ついでに、脳裏にひよろひよろしたシルエツトも浮かんだ。もしかして、いやまさかな。その声は、何故だか帝の手の辺りから聞こえた気がした。

2023 年 1 月 21 日 アカツキユウ

https://x.com/akatsuki_yu/status/1616594931770085376

アイリス

糸切帝は目を覚ました。薄いカーテンから漏れる光が眩しい。太陽はとつくに地平を離れ、青々とした空から光を放っていた。陽の当たる方向と光の強さからおおよその時間を認識する。8時くらいか。平時なら仕事に遅れると慌てる時間だが、幸いにも今日は休日であるというところまで、すぐに頭が働いた。

身体が痛いのは、硬い床で寝たせいだ。フローリングに直に身を横たえているのは何故か。普段はソファ―ベッドで寝ているはずなのに何故ここにいるのか。昨日は、確か――

急激に帝の頭はクリアになって、何故床で寝ていたのか思い出した。と同時に、勢いよく身体を起こした。柔らかな感触が離れる感覚と、身体を包むものの感触に、帝は自分の周囲を確認した。

今まで頭があったところには使い慣れた枕があった。手を握れば、そこにはやはり使い慣れた布団があった。枕に頭を預けた覚えもないし、布団を掛けた記憶もない。まして、これらは普段ならこの場所にない。近場にあったはずのテーブルも片付けられている。こ

んなことをするのは、してくれるのは、たったひとりしかない。しかし、その人物の姿は傍になかった。

寝ぼけている身体が徐々に五感を目覚めさせていくと、不意に甘い香りと何かを焼く音が飛び込んで来た。発生源は台所。誰かが、朝食を作っている。これも、思い当たるのはひとりしかない。帝が探している人物はそこにいる。

昨日は、成人式だった。彼ではなく、台所にいる『彼女』や、その仲間たちの一部が、成人式の日を迎えたのだ。その祝いに、飲み会が開かれた。何とも奇妙な縁だが、過去に帝の敵だった『彼女』たちの仲間と、帝の仲間（帝自身は『仲間』という単語に疑問があるが）は、今では定期的に集まるほどに距離を縮めた。そもそも、お互いを嫌っていたから敵だったのではない。各々に事情があり、その事情を互いに理解した。だからこそ、今のこの関係だ。

この飲み会の帰りに、『彼女』に「延長戦しようぜ」と宅飲みを持ちかけたのは彼だ。出会った時には未成年だった『彼女』も成人した。成人式より前には誕生日を迎えており、一緒に酒を酌み交わすことが出来るようになっていた。

帝は決して酒に強い方ではないが、物凄く弱い訳でもなかった。しかし飲み会の間、『彼女』に「飲み過ぎないでよ」と釘を刺され続け、何となく物足りない気持ちでいたの

だ。家なら、酔ったら後は寝るだけだ。と告げると、呆れ半分に宅飲みを承諾された。

釘を刺されるまでもなく、帝は酒に慎重だった。初めて『彼女』の前で酒を飲んだ際に、強い酒を一気に呷ってしまい、『彼女』に力づくで迫ったことがあった。初めてなのに強い酒をいきなり飲んだことも、それを一気に呷ってしまったことも、それらは決して帝自身の手だけでは無いのだが……その時に『彼女』を怖がらせた、という認識が、帝を慎重にさせた。それから、一気に酒を飲まないようには努めている……が、一方で酒の味は好きで、飲みたいものは飲みたいのだ。

帰宅途中にコンビニで適当に酒とつまみを買って、テレビをBGMにふたりだけの二次会を始めた。その時、テレビには芸能人のトーク番組が映っていた。新婚、既婚の芸能人が集まり、結婚前のエピソードや私生活を赤裸々に語っている。帝はひとりで気まずい思いをしていたのだが、そこで慌ててチャンネルを変えるのもおかしい。ちびちびと酒を飲みながら、トークを聞き流していた。

不意に、話題がプロポーズのエピソードに切り替わった。ドラマティックなプロポーズから、何気ない会話の中のプロポーズなど、プロポーズひとつで実にたくさんの物語が飛び出てくるのを、帝はぼんやりと聞いていた。

（『結婚』）

ずっと口に出来なかったが、帝には『彼女』と結婚したい意思があった。彼が家族を喪つてからもう何年も経つし、『彼女』との付き合いも長い。『彼女』に会えない時間を寂しいと感じたことも少なくない。こうして『彼女』が家に来ることも、一緒に朝を迎えることも増えた。『彼女』はまだ学生だが、帝にとってそれは些末なことだった。

もつと一緒にいたい、欲を言えば、この先の未来も『彼女』といたいと切望するようになっていた。

酔った彼の口は普段よりもはるかに緩くなっていたし、いつもよりも大胆になっていた。『彼女』の肩を引き寄せ、『彼女』の手を取り、『彼女』の顔に自分の顔を近づけて言ったのだ。

「結婚してくれ」、と。

しかし、『彼女』の返答も、その後自分がどうしたかも、帝には一切の記憶がなかった。どう思いうそとしても思いうせない。帝は酒で記憶がなくなる方ではない。確かに、彼は『彼女』に「結婚してくれ」と言った。そこまでは思いうせるのに――そこから先を思いうせないのは、ただひとつ。

（またやっちゃったのか……ッ）

おそらく寝てしまったのだ。

初めて酒を飲み、『彼女』に迫った時も、酒に負けて眠ってしまったことで、『彼女』にひどい乱暴を働かずに済んだ。だが今回は。

（大事なことだったのに）

帝はずっと『結婚』の二文字を口にする機会をはかっていた。きちんとした場所を設けるか、など、色々考えてもいた。いまひとつ踏ん切りがつかなかったのは、彼が過去に『彼女』にしたことがどうしても引っかけたからだ。

『お前、あいつと幸せになれると思ってるのか？ 夢見てんじゃねーぞ』

突然、ぞわり、と彼の背筋が凍り、周囲が一気に暗闇に染まった。目の前には、身を黒い闇に染め、異形の姿と化したかつての自分が、ひどく歪んだ顔でこちらを見ていた。

『彼女』の敵だった、『シメキリー』だった、自分の姿。

『お前はあいつを殺そうとした。いつまた手エ出すか分からねエなあ……帝よお』

幻影の自分が嗤いながら、硬直した自分の顔を撫でる。人間の手ではない、ざらざらとして冷たい感触が、帝の顔を蒼白に変えていく。忘れてはいない。忘れてはいけない。――『彼女』を、殺そうとしたことは。

帝は家族を喪った後、気持ちに余裕を持つことが出来なくなっていた。その余裕のなさを闇に付け込まれ、『シメキリー』として『彼女』の前に立ちはだかった。余裕に溢れた

『彼女』の顔は、彼には耐え難いものであり、それを破壊衝動に転化していた。最終的に、闇の力を増幅され、異形の姿と化した彼は、『彼女』を殺そうと首まで絞めた。

——だが、今は。

『彼女』は彼を赦した。闇に取り込まれそうになった理由も『彼女』で、闇から解放してくれたのも『彼女』だった。余裕を奪われていたのは貴方だけではないと、かつて『彼女』は彼に告白した。

『彼女』が帝の中で大切な存在に変わっていく過程で、『彼女』を壊したくないと何度思った。いつ、自分を闇に染めた衝動が目覚めるか怖くて、『彼女』に触れようとした手が止まることが幾度となくあった。

「大丈夫」

その度に、『彼女』は勝気な表情で見つめながら言うのだった。彼が最も愛する、あの表情で。

「こんなことじゃ壊れない。あの時壊れなかったんだから、ちょっとやそつとじゃ壊れないわよ」

『あの時』以後、帝の意識下において、『あの時』のような衝動は一度も起こっていないし、『彼女』も何かあったとは言って来ない。何かあった様子もない。そもそもとして、

『シメキリー』に変貌する力はどうに失われているのだ。闇の根源たるデスマーチは存在していないのだから。

（俺はもうあの頃の俺じゃねえ）

帝は幻影の自分を睨めつけ、告げた。帝の恐怖が完全に消えたわけではない。だが、『彼女』の存在は彼を満たして来たし、幾度となく『彼女』が掛けて来てくれた言葉に、そろそろ報いなければならぬと思う。

（俺はもうあいつを壊さねえ。壊したくねえ。俺は……俺はあいつとの未来を選ぶ）

帝の言葉を聞くと、幻影はぐしゃりと嗤った。帝から離れた身体が徐々に闇に溶けていき——最後に一言だけ、残した。

『忘れるな、俺を』

その一言が発せられた瞬間、帝の周りの闇が一気に晴れた。……少なくとも、帝はそうに認識した。目の前は見慣れた自分の部屋で、いまだ足の上に掛かる布団も、光が零れるカーテンも、先ほどのままだ。

自らが闇に囚われていたのはどれくらいの時間だったかは分からないが、闇に囚われる前から漂っていた甘い香りが、今も変わらずに漂っていることを考えれば、それほど時間は経っていないのかもしれない。

この香りはきつと卵焼きだ。ふわりとした甘い香りに、帝の胸は詰まった。まだ彼が家族を喪う前、独りになる前、母親はよく甘い卵焼きを焼いていた。朝の定番だった。この香りをまた感じられる日が来るとは思っていなかった。

香りを辿って台所にそつと足を踏み入れると、『彼女』がそこにいた。手狭な台所のカウンターには、ふたり分のトレイ。そこには、朝食が綺麗に並べられている。

帝が何度も夢に見ていたことがある。帝の生活に『彼女』がいて、『彼女』の生活に帝がいる。いつか子供が出来て、念願だった犬を飼って。生まれた子供が犬とじゃれ合う様子を。肩を寄せ合って見つめる自分たちの姿を。

『彼女』との、未来を選ぶ。

「晴」

『彼女』の、晴の名前を呼び、帝は彼女を背後から抱き締めた。

「あ、おはようミカド。今朝ごはん出来たとこだから持って……」

「晴」

振り返ろうとした晴を制止するように、帝は彼女を強く抱き締めた。顔を見て言いたかったが、顔を見たら言えそうにはなかった。何となく、手が震えている気がする。

「やり直、させてくれ、俺が昨日、言ったこと」

晴は帝の腕の中で、黙って続きの言葉を待っているようだった。一方の帝は、頭の中で続きの言葉を選んでいった。言いたいことが、伝えたいことがたくさんあった。しかし、長々と、色々なことを言う訳にもいかない。言わなければいけないことは、ふたつ。

「晴、俺は、お前を壊そうとした。あの事実は消えねえ。俺はまたお前を壊そうとするかもしれないねえ。……俺はそれが怖い」

「それは」

「黙って聞けって」

帝の語った内容に、再度振り返ろうとした晴を、帝は更に強く抱き締めて制止した。彼女が割り込んで来ることは分かっていたが、どうしても言わなければならなかった。『俺は奴と決別する。言うのはこれが最後だ。お前言ってたよな。』あの時壊れなかったから壊れない』ってよ。何度も。俺に、言ってくれた」

「……うん」

「お前が大切なんだ……壊したくない。これから、お前を、大切にしたい。俺と一緒にいたい」

帝はゆっくりと晴を解放し、ゆっくりと身体を向き合わせた。晴の顔が、心なしか上気しているように見える。緊張しているようにも見える。その顔を見たら、帝は余計に緊張

した。次の言葉が、最後。一番ちゃんと、伝えなければならないのは。

「……晴。俺と、結婚して下さい」

誠心誠意。頭を下げて。返答を待つ。晴の肩を掴んだ帝の手は未だ小刻みに震えている。早く。なんでもいい。はやく。

「……うん」

長い沈黙に耐えかねた帝が顔を上げると同時に、晴のひっくり返った声で返答があった。晴は、大粒の涙を流していた。

「うん、……うんっ」

声にならない声を出して、頷く晴の姿を見て、帝は四度、彼女を抱き締めた。ゆるやかに、しかし、しっかりと。

まっすぐな長い髪をさらさらと撫でながら、帝は安堵したように大きな息をついた。きちんとした言葉で返答が得られなくても、晴の様子だけで、分かる。が、何となく、欲が出た。

「晴。はーる」

悪い癖だと思う。晴は帝の余裕を奪って、帝は晴の余裕を奪ってきた。すぐに余裕を奪おうとしてしまう。本当に悪い癖だ。

「はーる。返事、くれ」

「……うう」

ぼろぼろと新たな涙を浮かべながら、晴はキッと帝を睨んだ。

「……っ、もう分かってるでしょ!? 意地悪い!」

「俺はちゃんと言ったぞ」

「ほんっと、貴方って人は……!! もう! 私も! 貴方と一緒にいたいから! ……はい、結婚、します」

前の言葉の勢いに対して、小さな、小さな返答だったが、帝の耳にはしっかり響いた。真面目な話のはずなのに、いつの間にか、いつもと同じような感じになっていたことに、ふたりは思わず笑い合った。

糸切帝は選択した。闇を振り切ることを。彼女と共にある、未来を。

玉緒晴は硬直していた。酒に酔っていた自分の幻聴かと思った。自らの耳を疑ったが、確認するすべは絶たれた。

もう一度確認しよう。只今、絶賛自分の膝で寝息を立てている人物、糸切帝その人が、何を言ったのか。

帝は確かに言ったのだ。突然肩を抱かれて、顔を寄せられて、どぎまぎする時間も隙もなく、「結婚してくれ」と。酒に酔っているとは思えないほど、はつきりと。はつきりと。しかしあまりに突然過ぎて、脳がその言葉を反芻している間に、彼は自分の肩で寝息を立てていた。声を掛けても、目覚める様子はない。その様子に、思わず晴は声を上げた。

「またあ!？」

以前にも、似たようなことがあった。あれは、帝の20歳の誕生日のことだ。自称・帝の友人にして、晴の元敵、……名前は何だっけ。エンセイヒ……ではなく、西園怜司。誤字ってる？ ちゃんと覚えてないから許して。

ともかく、帝の家へ向かう途中、何故か奴が現れて、晴にブランデーを渡したのだ。およそ中学生が渡すようなものではない、上等そうな酒を。未成年は酒を購入出来ない。

その酒を、紅茶と混ぜて出した。上品な飲み物になると、西園令司に唆されて。伝えられた比率は明らかに間違っていたのに、その間違った比率を何故か信じて、その通りに混

ぜて出してしまったのだ。しかも、その紅茶——ほぼ酒を、帝は一気に身体に流し込んだ。その結果、一気に酔っぱらって、晴は帝に力づくで迫られた。が、途中で帝は眠ってしまい、事なきを得たのだが……。

（ほんつつつつとミカドってばお酒に弱い！）

これ以外にも、帝は何度か酒を飲んで眠ってしまうことがあった。全く飲めないレベルではないし、寝てしまう以外に特に何かあったこともない。翌朝に引きずることもなく、寝る前までのことも大体覚えていて。しかしとにかく寝る。

晴の肩からずり落ち、膝の上ですうすうと、顔に似合わない可愛い寝息を立てる彼の姿に、晴は嘆息した。

「……大事なことだったと、思うんだけど」

酒の勢いが必要なことだったのかどうか、それは帝にしか分からない。しかし、何となく、帝がそういう風に言うとは、言おうとしていたとは、晴には考えにくかった。

BGMにしていたテレビ番組がまずかった。芸能人の結婚生活暴露トークなんか流していたから。付き合っていた頃の話、プライベートの話などをしていった流れで、プロポーズの話になった。多分、あれに刺激されて、口から出た。多分。多分そうだ。

あの言葉を言おうとして、延長戦という名の宅飲みを提案したのではないはず。帝との

付き合ひも長い。真意は帝にしか分からないが、晴には何となくそういう確信があった。

同様に、突然思いつきで言うとも思えなかった。つまり、きっと帝の中には、以前から浮かんでいたのだ。『結婚』の二文字が。

その思考に至り、晴はほろ酔いの頬を更に赤らめた。

例のブランドー事件の折に、晴はこんなことを叫んだ。

『そりゃいつかはミカドとの予定だけど！ まだ早い！』

あれから時は経ち、帝と一緒に朝を迎えること幾度。付き合ってもう5、6年くらい。長い時間を過ごしてきて、基本的に仲は良好。時折喧嘩はするが、毎度仲直りがきちんと出来ている。と思う。別れるような陰悪なムードになったことは今のところない。これほど長い間、こんな調子なのであれば、今後もきつとこんな感じだろう。であれば、考えることはひとつ。

いずれ、帝とそうなれたらいいなあ、と。

晴はそろそろと、起こさないように帝の身体を床に横たえた。ソファーベッド横に横たである彼の枕と布団を持って来て、布団を掛け、頭の下に枕を差し込んでやる。帝はやや身じろぎしたが、自分の良い位置を見つけたのか、やがて落ち着いて再び寝息を立てた。

意外とさらりとしている彼の髪を撫でる。寝ている顔を見ても、彼の顔は精悍だと思う。

彼に見つめられる度にドキドキしていたし、今もそうなる。

髪を撫でていた指を、頬へと移動する。愛しさが込み上げて来て、その頬へそっと口づける。

「……待ってる」

明日は、彼より早く起きよう。きっと彼は言ったことを覚えているけど、彼が切り出して来るまで、何事もなかったかのように、朝食の支度をするのだ。

彼の中にその文字があるのなら、彼はもう一度言ってくるだろう。でももう言われることは分かっている。心の準備をしておこう。

玉緒晴は待っている。それでも彼女は余裕を奪われる。喜びに涙を流すことを、この時の彼女が知る由はない。

2019年8月16日 アカツキユウ

https://x.com/akatsuki_yu/status/1162370837598486533